仏教企画通信
77号
発行日｜令和6年9月1日
発行所｜有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax.042-782-5117
発行人｜有限会社 仏教企画代表　藤木隆宣
編　集｜加藤順子
Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

みえない世界について考える

日本の伝統的世界観

内山 節

自然（しぜん）と自然（じねん）

東京でも、私の村の家がある群馬県上野村でも、まだ夏ゼミの声も聞こえないというのに、夜遅くなると秋の虫が鳴き始めている。虫たちも季節の変化を読み切れなくなっているのかもしれない。

日本列島に暮らした人たちは、夏ゼミの声を聞くと盛夏の到来を感じた。秋の虫たちの声を聞きながら、秋風の吹く季節を感じていた。虫の声という「音」が聞こえているだけなのに、その奥に存在する、みえない、聞こえない何かをつかみ取っていたのである。

上野村の家の近くには三笠山という山があって、そこには忉利天（とうりてん）のつくる極楽浄土があると伝えられている。この極楽浄土も私たちにはみえない世界で、だから本当にあるのかと聞かれたら、村人は誰も答えようもない。「そう言われている」というだけである。しかし積極的に否定しようという人もいない。「そう伝えられている」のままでいいのではないかと思っているのである。あえて白黒の決着をつける必要はない、と。

日本の伝統的な世界観では、この世界はみえる世界とみえない世界が結び合ってつくられていると考えられてきた。みえる世界の奥には、このみえる世界をつくりだしているみえない世界がある。たとえば自然（しぜん）というみえる世界の奥には、自然（じねん）というみえない世界がある。

自然（しぜん）という言葉は、明治になって、たとえば英語でいえばNatureという単語を訳すためにつくられた翻訳語だった。それまでの日本の人々の発想には自然（しぜん）と人間を分けてとらえる発想はなく、隣の人がいるように隣の木があると考えてきたのである。だが、自然と書く単語は古代からあった。それは自然（じねん）と読まれ、意味は「おのずからしかり」だった。つまり名詞ではなく、形容詞、副詞的な使われ方をしていた。いまでも私たちは「自然（しぜん）の成り行き」などということがあるが、これが古語の名残である。もっとも少数例として鎌倉時代あたりから自然（しぜん）と読む読み方もあったのだけれど、こちらは突然にという意味で、いま私たちが使っているような自然（しぜん）ではなかった。

日本の伝統社会では、自然（しぜん）も、そして人間もまたみえない本質がつくりだす現象に過ぎないと考えられてきたのである。自然（しぜん）をつくりだしているのは自然（じねん）という「おのずから」のままに結ばれた関係である。そして人間もまた、さまざまなみえない関係によってつくりだされている。たとえば自然（しぜん）との関係がその人をつくり、多様な人間関係や社会、文化、経済などとの関係がその人をつくっている、と。

みえない世界のみえない本質

縦横に結び合っているさまざまな関係から、いろいろな現象が生まれてくる。ゆえに現象は本質ではないのである。本質は常にみえないところにある。この考え方からは、人間の本質は霊魂だという視点もでてくる。霊魂というみえないものが本質であり、そこから生まれた現象がそれぞれの人間だというとらえ方である。ただし次のことには注意を払っておかなければいけない。近代化された社会のなかで暮らしている私たちは、霊魂をも自分の所有物のようにとらえる。すなわち、私の霊魂というように。ところがこういうとらえ方をすると、霊魂と自我の区別もつかなくなる。

そうではなく、霊魂の本質は結び合う世界のなかにある。あらゆるものが結び合いながら、生命世界をつくりだしている。この結び合う世界のなかに霊魂が存在しているのである。このようなとらえ方が成立していたがゆえに、日本の伝統社会の人々は仏教を受け入れた。大乗仏教は、自我は虚無であり空であると教える。そして真理もまた空であると考えるのが大乗仏教の思想である。なぜどちらも空なのか。自我というような実体は存在せず、それぞれの人々をつくりだしているみえない関係が本質であり、そのみえない関係としての真理はとらえようがないからである。

私たちは何かをとらえようとするとき、概念を使って認識しようとする。たとえばここは村だとか、町だとか都市だとか。さらにはここはスーパーだとか学校だとか、役所だとか。また、あの人は公務員だとか先生だとかそば屋だとか。こんなことを並べていったらきりがないが、要するに私たちはすべてのものに概念を与え、その概念を並べることによって物事を認識しているのである。

だがこの概念は、人間がつくった虚構に過ぎない。つまり、本質ではないのである。それなのに、私たちは概念に支配されることによって、本質がわからなくなる。なぜなら本質の世界は関係が存在しているだけで、ここでは概念は成立することができないからである。本質は概念なき世界だ。とすればその世界は、私たちにはみえない世界でありつづける。

大乗仏教がもたらしたこのような思想を、日本の伝統社会の人々は受け入れた。そしてその理由は、共通する思想をすでにもっていたことにあった。虫の声の奥にもみえない世界があることを感じ取る。自然の奥にもみえない世界が

みえない何かへの信心

ところで、いまから30年くらい前からだろうか。若い人たちのなかからパワースポットブームが生まれてきた。私の周りでも、普通にそういうことを話している人たちが現れた。耳を傾けてみると、その人たちにはふたつの傾向があった。ひとつはパワースポットと言われる場所に行くと、不思議なパワーを感じる人たちであり、もうひとつの傾向は、自分では感じられないけれど、そういう場所はありうると考えている人たちである。

すなわち、どちらにしても遊び半分ではないのである。

ときに空から、ときに地面の奥から、さらにはそこにある石や木や滝やときには人工物から、みえないエネルギーが流れ出てくる。そのエネルギーを感じる人もいるし、感じられないけれどそういうものはありうると考える。このような人々からパワースポットブームは広がっていった。

そんな様子を見ていると、私には伝統社会で育まれた基層的な思想とでもいうべきものが、現代社会になってもなお消えずに残っていると感じられたものだった。私たちのみえる世界の奥にはみえない根源的な世界があり、それを感じられることに価値をみいだす。そんな心情が、パワースポットというかたちに変わってよみがえってきた。

そしてその頃から、私は若い人たちが信心深くなってきたとも感じるようになった。私の村の家に来る人も、当たり前のように山の神や水神に手を合わせ、いろいろなところに祀られている石仏にも手を合わせている。いや正確には石仏に手を合わせているのではない。石仏の奥に存在するみえない仏の世界に手を合わせているのである。

ここにあるのは人間中心主義の発想ではない。個々の人間も、その人の自我も虚無でしかなく、この世界をつくりだしている根源的なものはとらえようのないものとしてある。この考え方から人間中心主義的な発想はでてこない。とともに人間の自我も意思も、さらにはあらゆる欲望も、真理の世界に気づかない人間がもたらす悲しい現実だととらえるのだから、この思想は平和である。

人間は、自分たちがこの世界の主人公だと思ってはいけないのである。常に人間の限界を感じながら、みえない本質、みえない根源への畏敬の念をもちつづける。人間をカギカッコに入れ、私たちはカギカッコのついた「にんげん」でしかないという思想からしか、欲望の虚妄を感じとることはできない。人間たちの欲望の肥大化した現実から生みだされたのが戦争である。戦争の背後には、人間中心主義的な発想と、自我や意思、欲望を肯定していく思想がある。

内山　節（うちやま・たかし）
哲学者。1970年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』（全15巻、農文協）『半市場経済　成長だけでない「共創社会」の時代』（角川新書）他多数。

寺の歴史に強くなろう

千葉県柏市　龍泉院東堂
椎名宏雄

いやしくも宗門寺院の問題を取り上げようとするからには、私自身の身を少し紹介する事を此にお許しいただきたいと存じます。

私の父は千葉県の農村寺院の住職をしながら、東京の私立大学の事務職を長らく努め、やがてそこの宗教学科の教員を兼ねていました。その為に寺の方には檀務が出来ると戻って努めるという、いわゆる二足のワラジ履きの生活でした。東京は高田馬場駅から徒歩10分あまりの所で、私はそこ（淀橋区戸塚町）で生まれました。姉2人と妹1人（5歳で早世）との4人兄弟でした。

私が生まれた昭和9年は国情が風雲急を告げる時代であり、小学校は国民学校と名称が変わり、私は国民学校の1年生として高田馬場駅の隣にあった戸塚第二国民学校に入学しました。しかし国情はますます悪化し、父は世界大戦の開始を予知して、妻子5人を千葉の寺院（当時は東葛飾郡手賀村泉、現在の柏市泉）、つまり龍泉院に疎開させたのです。当然、学校は転校となり、想像もつかぬ環境の大変化にありましたが、昭和20年8月15日に第二次世界大戦は終戦を迎えた事はご承知の通りです。

ところが私の身辺には終戦だけではない大変革があったのです。つまり、終戦の日からわずか7年目の昭和27年夏に母が急逝し、翌28年4月にはこれまた父が急逝したのです。私は県立高校3年の時に他界した母の時のほうが悲愁が大きかったのは、いつも一緒に居て頼み事を聴いてくれていたからでありましょう。

ともあれ、住職夫妻を失った寺としては後任を探さねばならない。わが家の親戚と寺の役員が何度も鳩首談合の末、後に私の本師となり嗣法の師となった教区の最長老に兼務を依頼しました。私とは実に45歳も年長の老僧でしたが、老僧は若年の時に出家し叢林生活が長い禅僧らしい禅僧であったから、結果的には大正解であったと思います。

さて、某私立大学から駒澤大学仏教学部に転校した私は、はからずも東京高輪の泉岳寺と親交を重ねる幸運に恵まれました。泉岳寺は四十七士の墓所として夙に著名ですが、宗門的には江戸三か寺の一として学問を学ぶ為の修学を重視する別格地にランクされる名刹です。その様な事も無知のままに、この名刹で立職させて頂き、出入りする多くの碩学・老宿と面識を重ね、山内の皆様とも親交を深められた事は、私の宗門歴の中では実に大きな仏縁でした。

特に当寺に生まれて、今では前住職であり、また駒澤大学教授から名誉教授になっておられた小坂機融先生は私と同級であり、学生の頃はよく一緒に相撲を取り、何度もアルプス登山を共攀し、大学へは泉岳寺から共に通学することも珍しくありませんでした。江湖会の同旧疏奉読は、同時の越山安居でしたから、私は2度奉読し（別格地の為）、小坂師からは1度読んで貰い、私は3度目は越山法堂でと約していただけに、2019年大晦日に彼の遷化は青天の霹靂でありました。哀悼文は『傘松』にも載せましたが、翌年春の永平寺別院での本山葬の際には、不肖仏事師の一員を汚しました。が、唯涙滂沱として扁界盲目でした。因みに現在副貫首の羽仁素道老師は、小坂師とは実の従兄弟に当たるから、学生の時は泉岳寺から通学していたので、

いきおい私も親交を深められたのは法倖でありました。とにもかくにも、こうした仏縁により、私の曹洞宗門に対する知識や理解の多くは、泉岳寺界隈から豊富に受けたのです。

さて、私個人の宗門との仏縁は、その後今日に至るまで継続する訳であります。本紙の要望に応えるためには、従前の雑言弄語とは別の視点に移らなければなりません。まずは、どこの寺院でも最もポピュラーに行われており、寺院の運営や活動の基盤となっている葬斎、その葬斎の重要な構成要素である「香語・引導」についての適切性や所感についての妄語をご披瀝して参りました。

そして次は、と考えますと、これは次から次へと妄語弄筆が浮かんできて困るほどです。つまり、法話の諸問題、梅花講活動、寺報の発行、近年は全国的に重視されている文化財の保護活用、諸々のボランティア業務……といくらでも有意義な問題があり、私ごときが薄慮の筆力で言わずとも、多くの宗内宗外の定評ある彼此の刊行物や業界紙には、現代の寺院のあり方に対する示唆・企図・示例などは豊富です。ある意味では、現在の日本では、それだけ寺院・僧侶は各方面から期待されているのです。

ですが私はいたずらに何でも良いといっているのではありません。それよりも、寺院住職たる者は、まず己れを知ることであります。年齢・性別・学歴を問わず、まず自分が住職している寺院のことを悉知するのが大前提であるといいたい。これは当然のことだと一笑に付されるかも知れませんが、最も重要でありながら、案外「灯台もと暗し」で自分の寺については疎い住職を従来大勢知ってきたから申すのであります。

自分の寺について紹介された文献などない、参考文献など皆無だ、などという御仁に申し上げます。だから面白いのです。直接の参考文献などないほうが、かえってやり甲斐があるではありませんか。だいたい、寺社というものは、そこに故意に捨てられたもの以外は、どんな被祀物・奉賽物であっても、かならずみな由緒縁故があって祀られたのであります。

そういう由緒等はほとんどどこかに書かれたり彫られたりして、記録が遺されているものです。むろん長年月の間に風化したり磨滅したものもありますが。でも文字が不明になっても、形状・形象が遺っていれば、それは立派に記録の対象になります。こういった形状や文字を調べて、1点ずつ調査表に記録してゆくのです。調査表などは好きなように1枚を作って、あとはコピーをすればよろしい。こんな表に何でも記入する。ただし、墓石が非常に多い寺院は、歴住塔とか特に古いものとか、性格・年代・形状などで絞るとよろしいでしょう。こうした調査を、一般に「金石調査」というのです。

私は町の教育委員会から依頼されて、金石調査を約30年実施しました。墓地などは約百か所以上、何万個もの石塔に携わりました。お陰で、石造物ならば石材・形状・文字の解読（若干の梵字を含む）などは、ほぼ自然に覚えました。関東には中世特有の板碑（板石塔婆）が多く、その宗派的特徴が表面に彫られているものが多くあります。曹洞宗は板碑そのものは僅少のようです。でも、わが町の板碑は、県下でも質量共に非常に豊かであります。

宗門に関係深い石造物では、上部に「烏八臼」と彫刻されたもので、沼南では私の寺と末寺の寺との2か所にしか見られず、江戸期の面山さんなどにはこの意味への言及があります。驚いたのは九州天草で高さ3メートル、横2メートルもある広大な烏八臼を上部に戴いた大石碑を見たことがあり、島原の乱の犠牲者への供養であれば、今後の鈴木正三研究に寄与すると思われます。また、私の檀家墓地に一基のみ「祖師西来意」と彫った墓石があり、これも大いに注目されましょう。ともあれ、このように身近な所から金石調査をすることは必ず新しい発見があります。どなたでも簡単にできることですから、私は自信をもってお勧めする所以であります。

「金石調査」は寺社の歴史を知るための初動であり、重要捜査です。古文書が皆無でもそれは可能ですから、参考文献が無いから何も分からないなどといわずに、これは是非敢行することをお勧めいたします。そして、石造物から次には仏像・仏具類へと対象を進めましょう。ですから、前述の調査表の記入欄にも「類別」の欄が必要でした。寸法を測るには、小さなスケールも必要となります。光線の具合で文字が見えにくい時は「○○の方角」と書いておくと、あとで役に立ちます。石造物が苔むしている場合は、洗う道具も必要ですね。もう文字が磨滅して肉眼の解読不能な場合は拓本に取るという手がありますが、これには一寸した技法が必要となりますが、簡単な方法は、薄く丈夫な紙を張りつけ、上から色鉛筆で擦るだけで文字が出てきます。こんな創意工夫を重ねて、文字の採取は自然に上達します。

むろん、カメラ・スマートフォンなどの機具は、後々まで役に立ちます。最近は解読不明な古文書でも解読するアプリが開発されていますから、もう拓本採取など昔日の談かも知れません。しかし私の地区の檀家で元村人でありながら廃家となった家の生まれの方から奉納された先祖の遺品の中に、かの有名な山崎弁栄聖者（明治末期の浄土宗の高僧で本邦初の仏跡参拝者、米粒上人とも称される）がインド・ブッダガヤで模写した画像を刻石し立石したものの拓本がありました。原石は東北大震災で破損したが、初刷りとみられる拓本は鮮明。そこで私は早速表装して宝蔵に収めました。

また私は昔の古本堂（享保19年・1734建立）の約300年弱を経た建物を改築しましたが、取り壊しの年の元旦、最後の祝聖と気合いを入れて読経していた最中、突如として前机が金色の光に包まれ、読経後にローソクの光で諸方を照らし、前机の裏面に書かれていた従来未知の文化3年（1806）筆写の歴史事項を発見したこともあります。

このように、「類は友を呼ぶ」の譬えではないですが、金石調査一つひとつがお寺の大発見に繋がることもあります。そして自分のお寺に強くなりましょう。これは将来、寺の紹介紙、寺史の発行に役立つこと必定と考えます。

こんな文字を全部読み取る

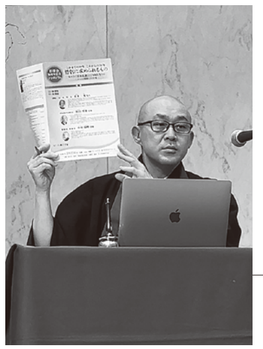
石仏群（千葉県、龍泉院）

彩青会30周年記念シンポジウム開催

仏教はどうカルトと向き合うべきなのか

取材｜やなぎさわまどか

2024年2月22日、埼玉県第二宗務所青年会「彩青会」設立30周年を記念したシンポジウムが開催されました。これまでの歩みを振り返りながら現状の課題であるカルト教団の脅威に触れた約2時間。登壇者は、宗教学者の正木晃さん、世界仏教徒青年連盟会長、大阪府洞雲寺住職である村山博雅老師、埼玉県曹源寺の住職で、中村瑞峰老師、進行は彩青会会長、埼玉県大願寺住職の来馬司龍さんでした。宗派だけではなく、無宗教や他宗教の方、会員であるか否かも問わず、あらゆる方々に開かれた当日の様子をお届けします。



来馬司龍さん

来馬さん　彩青会は平成5年、1993年に発足いたしました。その後、1995年には地下鉄サリン事件と阪神淡路大震災、2000年にはアメリカ同時多発テロ、2011年東日本大震災、その後もイスラム国や中東における宗教的な対立が続き、2022年には安倍元首相の襲撃事件に端を発して旧統一教会の問題が明るみになりました。宗教問題と自然災害が続き、社会情勢の変化やテクノロジーによる変化など、激動の30年だったと言えます。大きく変化する時代に、私たち青年僧侶にできることは何か。時代に即した学びを共にするためにも、今日は講師の方々のお話から考えていきたいと思います。

マインドコントロールとは何か。カルトと宗教の違いから、人々に求められる元気なお寺を目指してほしい

（正木 晃さん）

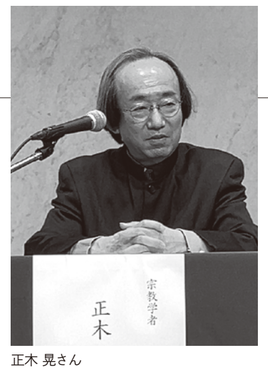
正木さん　私自身が直接的に関わったカルト教団は、オウム真理教です。1991年12月には麻原彰晃にも直接対面しました。オウム裁判で争点となるのは、教団の事件に加担してしまった信者たちに対して、教団からのマインドコントロールがあったかどうか、ということです。

オウム真理教の事件に関わった元信者たちは、一般的には十分な教育を受けた人たちでした。医師や学者、大企業の管理職という方も多かった。彼らは共通して、生きているうちに悟りたい、という気持ちがあったのです。ある信者は「仏教のお寺は単なる風景でしかなかった」と書いたそうで、彼の求めに対して、仏教関係者が本気で手を差し伸べたのかどうかが問われる言葉だと思います。結果として、彼なりに一生懸命にやったことは、たくさんの人を傷つけ命を奪うという悲惨なことになってしまいました。

では、カルトと宗教の違いは何でしょうか。旧統一教会の問題研究における第一人者で、北海道大学の櫻井義秀先生が書いた『信仰か、マインド・コントロールか－カルト論の構図』という本にもありますが、大きな違いは3つあります。組織よりも信者のことを優先しているかどうか。信者に充足感があり、教団の社会的活動も評価されているかどうか。そして、信者個人の内面や家族など生活に土足で踏み込んでいないかどうか、です。

昨今ニュースを見ていたら、アメリカの経営者が人間の脳に埋め込んだ電極とコンピューターを繋ぎ、意識するだけで何かを起動できるような実験を始めているそうですね。オウム真理教は最新技術や研究をカルトに使った、ある意味で先駆けです。生成AIが台頭する今、宗教とテクノロジーについてもきちんと学び、考えておくことが必要だと思います。

愛知県に、杉本誠さんという旧統一教会からの脱会に大変尽力された牧師さんがいます。これまでに700件近い相談を受け、うち約120名に時間をかけて寄り添い、教団から脅迫や嫌がらせも受けながら、ほとんどの方を脱退させました。杉本さんの話では、旧統一教会は信者に「心情ノート」なるものを書かせ、個人の心のなかに踏み込んでいたんだとか。杉本さんとの対話によって脱退した元信者たちは、最終的には自主的に脱退しています。つまり信仰ではなくマインドコントロールされていた。「主体的な信仰であれば、牧師の話を聞いたくらいで辞めるわけがない」と杉本さんも仰っていました。



正木 晃さん

こうしたことから考えると、仏教や僧侶の役割とは、人格を育むことではないでしょうか。僧侶が僧侶らしく、仏教的人格を育成すること。人口減少が進むと、葬儀や法事だけではお寺の運営も立ち行かなくなるはずです。これから求められることは、仏教の教えを丁寧に、わかりやすく説くことでしょう。助けを必要としている人はたくさんいます。東日本大震災の直後も、死者供養に次いで僧侶に寄せられたのは「お坊さんのいい話が聞きたい」という多くの声でした。ただ残念ながら、いい説教ができる僧侶は少なくなったと言わざるを得ません。お通夜もそうです。大切な人を亡くした直後、仏教の教えで心が救われるでしょうし、仏教そのものにも心を開くと思いますが、良い通夜説法をできる僧侶は少なくなってしまいました。

皆さんにぜひ考えてみてほしいことは、専門用語を使わず、本来の意味を、相手にわかるように配慮して説く大切さです。また曹洞宗の方においては、人間と同じくらいのレベルでペット供養もするべきだと思います。なぜなら瑩山紹瑾さんの『瑩山清規』には、動物供養について書いてあるからです。前世がコウモリやオケラかもしれない、来世でまた生まれ変わるかもしれない、全ての命に差別はない、と説いているではないですか。新時代というものを意識して、人から求められるお寺であってほしいと思います。

不信から向けられた問いを考えた。僧侶としての自信を持ち、意識的な発信で取り戻す信頼

（村山 博雅老師）

村山老師　わたくしは現在、世界仏教徒青年連盟の会長を務めております。世界各地のさまざまな仏教徒の方々とお付き合いをするなかで、僧侶としての自分を見つめ直して参りました。

カルト教団に関しても、実は国が変わると認識が違うこともたくさんあるんですね。世界仏教徒青年連盟の本部はタイのバンコクにあるのですが、タイというエネルギッシュで、多種多様な価値観と文化が息づく場でカルトに関する認識を尋ねましたら、「あらゆる考え方を認めている」という言葉が返って参りました。どういうことか。そもそもタイは日本と違って、王室をはじめ経済界の名だたる経営者も僧侶に敬意を払う仏教国です。宗派ではなく、それぞれの僧侶にお布施ができるような基盤が確立していますし、布教活動をする方の中には、認可を受けた在家の方もいる。そうした環境で宗教団体の問題が起こるとしたら、ただ法律で裁かれるだけのこと、と言うのです。カルト的な概念がないとも言えるかもしれません。

村山 博雅老師

またわたくしは海外での活動だけではなく、大阪でお寺の活動も行っており、その中で皆さんにお伝えしたい出来事があるんです。以前ある檀家さんのご葬儀のために、お棺のことなどを相談していた際、喪主様の息子さんから「自分が調べた金額よりも高いのはなぜか」と質問されました。ちょうど旧統一教会の問題がものすごく取り上げられていた時ですし、葬儀のタイミングで金銭の質問をすること自体、あきらかに不信感があるんだと感じました。大学生で、恐らくいろんな情報を広く受け取れる青年が、マスメディアの影響なのか、ひとつの価値意識を作り上げてしまった。カルトではないものに対して、反カルト意識を持ってしまっていたんです。結果的に、お墓を持って離檀されてしまいました。これは大変な状況が起こり始めていると感じた出来事です。

タイでは国王が自ら仏教の素晴らしさを発信しています。宗教的教育があり、それによって信頼を得ているんです。私たち伝統仏教の僧侶も、人生を豊かにする教えをたくさん伝えられるはずです。若い僧侶の皆様方にはぜひ、私たちのバックボーンを信じて欲しいとお伝えしたいです。仏教で私たち自身が救われたことを思い出し、勉強を続けていくこと。多様な方々と出会い、それぞれに対して伝える自分の表現方法を磨くこと。そうした活動が、僧侶としての在り方を守ることにつながると思います。

僧侶として先人たちから受け継いだ文化がある。身近な存在に丁寧に向き合うことで高める関係性を

（中村 瑞峰老師）

中村老師　私は駒澤大学の学生時代から、新興宗教に魅せられる人々の心理に関心を持っていました。いろいろな大学に原理研究会（原理研）があった頃で、卒論のテーマも「現代青少年の宗教意識」でした。今日は実際に体験したことをお話したいと思います。最初は新興宗教の神慈秀明会。同系統の分派に「真光」があります。1978年（昭和53年）、大学構内で「5分であなたの幸福を祈らせてください」と申し出があり、どうぞと答えました。目を瞑り、明主様ありがとうございますと3回唱えるようにと言われ、信者が私の頭上に手をかざし、それが魂を浄化する作法だと言う。都立大近くの支部へ行くと、明るい感じの普通の民家で、信者たちが〝浄霊〟の所作（手かざし）をしたり、いろんな話をしていて、私は中年の女性信者から教義の説明を受けました。他の新興宗教でもそうでしたが、「現代は末法の時代」と話していたのが印象的です。キリスト教の「終末論」のような捉え方をしていました。

中村 瑞峰老師

統一教会に声を掛けられたのは、1980年（昭和55年）でした。教会に行くと、女性信者が話す「神様に導かれるかのように教会に来た話」をみんな笑顔でうなずいて聞いていて、疑い深く聞いている自分の方が悪いような、妙な気持ちになった事がありました。

私を誘ってくれた男性とはよく話しましたが、時々私が話をしている間は目を瞑り、口の中で何かを唱えていて、明らかに私の話を受け入れていない様子でした。一度、教会の教えを批判しましたら、目が般若の面のように釣り上がり、普段は穏やかな人でしたので驚いた事がありました。

当時、卒論のために250名ほどカトリック教会や統一教会の若い信者、仏教学部や文学部の学生にアンケートをとりましたが、統一教会の信者たちはとても真面目で、真剣に、自分は社会にどんな貢献ができるかを考えていた人たちだったと言えます。

80年代は冷戦時代、共産主義国が多くあった時です。キリスト教では神がアダムとイブをつくり、そこから人間が生まれたとしていますが、統一教会ではエヴァというんですね。エヴァと悪魔の間に生まれたのが人間で、だから人類はみんな悪魔の子、それを神の元に戻すのが教祖夫妻だと信じられていました。〝世界日報〟という教団の新聞では、中東は神とサタンが闘争している地域だとか、共産主義はサタンだと決めつけたり、国際勝共連合という共産主義対策の団体を造ったりしていました。政教分離という言葉がありますが、積極的に「社会を良くする」とうたっている宗教団体は、必ずといっていいほど政治に関わっています。

新興宗教を調べていると、異常なまでに教祖の力を強めようとしていることを感じます。また、彼らには自らの教えに基づいた文化がないため、例えばギリシャ・ローマの神殿造りや寺社の伽藍のような、伝統的な文化を利用して権威付けをしています。

そう考えると、我々のような僧侶は非常に大きなアドバンテージをいただいているんです。我々が引き継いだお寺を一から建てるとしたら、土地を含め莫大な費用が掛かって大変です。大切なことは、何か特別な力を持つようなことではなく、日々の勤めを丁寧にすることだと思います。ご縁のある方々のご供養を丁寧に行うこと。日々の勤行や枕経、通夜、葬儀、中陰供養、命日、お盆等、全てに時間を費やして丁寧に行うんです。そうしている間にいつの間にか信頼を得て、より良い関係性が育まれるのだと思います。

また日本の寺院は、伽藍、仏具、仏像彫刻、庭園、書画を始め、花道、茶道、書道等、日本文化の総合体であることも忘れてはいけないと思います。僧侶としてすでに身近にあるものを見つめ直して、現代に寺をどう活かすか、常に念頭に置いて行う事が肝要だと思います。

The Japanese Society for the Study of Prayer, Salvation and Heart-Mind

第9回 日本「祈りと救いとこころ」学会学術研究大会

大会長　白井 幸子（ルーテル学院大学 名誉教授）

会　場　ホテルメトロポリタン（東京・池袋）

2024年 11月30日（土）

大会長講演　10:00〜10:55　座長：大船榎本クリニック 斉藤 章佳

『混乱した現代社会の中に救いを求めて〜我々はどこに希望を見出し得るか』

ルーテル学院大学 白井 幸子

教育講演　11:00〜12:00　座長：当学会理事 安田 美彌子

『救いと癒しの源泉であり我々を希望へみちびく　—終末論的な視点より—』

千葉キリスト教会／石郷岡病院 山中 正雄

基調講演　13:00〜14:00　座長：東邦大学 齋藤 益子

『病む人と共に歩んだ60年の歩みから』　千葉県がんセンター 長山 忠雄

メインシンポジウム　14:10〜16:10　座長：国立精神・神経医療研究センター 張 賢徳

『私にとっての救いとは』

ルーテル学院大学/日本ルーテル福音教会 石居 基夫

ケアミーツアート研究所 入江 杏　王子北教会 沼田 和也

公開講座（参加費無料）　16:20〜17:50　座長：ルーテル学院大学 白井 幸子

『なぜ「救い」を求めるのか』

東京大学／上智大学グリーフケア研究所 島薗 進

一般演題　発表者を募集しています

発表要旨を2024年9月14日（土）までに、下記大会事務局までお送りください。

懇親会　18:00〜　プログラム終了後、懇親会（情報交換会）を行います。

大会参加の事前申込みは、ホームページからお申込ください。

参加費						
会員	事前 2,000円 当日 3,000円	一般	事前 3,000円 当日 4,000円	学生	事前 1,000円 当日 2,000円	

懇親会費 2,000円

学会入会 入会金：1,000円／年会費：5,000円

学会ホームページ http://www.jpshm.jp　大会ホームページ｜事前申込／一般演題登録はこちら▶

日本「祈りと救いとこころ」学会 ［理事長］榎本 稔（榎本クリニック） ［実行委員長］斉藤 章佳（大船榎本クリニック）

お問い合わせ 学会事務局 TEL.03-3982-5345　〒171-0021 東京都豊島区西池袋1-2-5 医療法人社団 明善会 榎本クリニック FAX.03-3982-6089 E-mail:info@jpshm.jp

世界の絶望に光を当てる。

現代美術家 上條陽子さんを訪ねて

取材＝やなぎさわまどか

『曹洞禅グラフ』170号の特集のため、現代美術家・上條陽子さんにお会いできる機会に恵まれた。アトリエにお邪魔してうかがったのは、25年以上に及ぶパレスチナ支援活動のこと。1999年以降、画家としてパレスチナの子どもたちに絵画指導を行い、現地訪問は11回。〝天井のない牢獄〟と呼ばれる自治区ガザにも2回訪問している。支援活動を継続するために団体を立ち上げ、日本での展覧会や招聘など、積極的な活動を今も継続中である。どれも簡単なことではなく、むしろ前例がないことばかりだが、「自分ではそんなにすごいことをしてると思っていないから」と、普通のことのように話す。しかし画家として自身の創作活動を行いながら、非常に困難な状況にある人々を世界に示す上條さんの活動に、影響を受けた人は少なくないはずだ。初めて訪れた25年前、ガザを囲む壁も今ほど高くなかったと言う。「今思えばまだかろうじて秩序があった」と、少し視線を遠くしながら話してくれた。もしもまたパレスチナに行ける機会ができたら行きますか？と問うと、間髪入れずに「もちろんよ」と力強い声で返された。「また会いたい人たちがたくさんいるもの」。

80代後半を生きる上條さんにとって、こうした活動の源泉はどこにあるのか。幼少期の体験から最近思うことまで、時制を行き来しながら重ねた質問の全てに、丁寧に答えてくれた。

結論から言えば、上條さんのお話から得た一番の学びは、苦悩や絶望でさえ終点とは限らない、ということだった。常軌を逸した理不尽さを目の当たりにし、底知れぬ悲しみに襲われたとしても、新たに希望や美しさが生まれる可能性を諦めないこと。暗闇の意味を問い、微かな光を見つけ出すこと。そうした強い気持ちが、上條さんの活動の基盤にあるように思えた。

上條さんは1978年、新人洋画家の登竜門と言われる安井賞を受賞している。同賞を受賞した初めての女性でもある。シャルル・ボードレールの詩に影響を受けたという受賞作「玄黄（兆）」は、天地の間で揺らめく人間の在り方が描かれている。過去のインタビューで「人間の苦悩や不安を描くことが多かった」と、初期の作風を振り返っているのを読んだことがあった。確かに「玄黄（兆）」を眺めていると、人はゆらめきながら何をするべきなのか、どこから来て、どこへ行くのかと、お腹の底の思考が突かれているような気持ちになる。その後、50代で大病を経験した後の作風について訊ねると、「病気のあとは描きたいことが一変した」と教えてくれた。二度の大手術を経て、油絵の匂いが体調に響くようになったため、画材は切り絵など紙が中心に変わった。生きることに対する解像度が強まり、上條さんの作品はより一層、いのちの躍動感や激しさのような表現が強まっている。

上條さんは話の端々で「私は絵描きだから」と言う。それがとても素敵だ。パレスチナに行ってみたいと思ったきっかけも、子どもたちに絵を教える理由も、不可能だと言われたパレスチナ人画家3名の日本招聘を実現できたのも、そして長年この活動を継続できている理由も、全て「私は絵描きだから」と初めに付けてから話し出す。絵や芸術について話す時は、より大きく手を動かし、言葉は加速度的で、表情はいきいき。固有名詞や数字などを澱みなく話すからすごい。現役であり、画家であることがアイデンティティ。上條さんにとって、生きることは描くことなのだと感銘を受けた。

2023年10月のパレスチナ侵攻後、同年12月には「ストップ・ザ・ウォー　壁の中の子どもたち展」が開催された。パレスチナで出会った子どもたちの作品を多く預かっている上條さんは、こうして定期的に子どもたちの作品を展示し、パレスチナで見たものを語る場を作っている。子どもたちの絵の多くがカラフルで、枠いっぱいに自由に、実に生き生きと描かれているものが多いことが印象的だった。紛争のなかにあっても子どもらしい感性をすくい上げたのは、上條さんだからこそ可能だったのではないだろうか。

インド独立の父マハトマ・ガンジーは、無意味に感じる小さなことであっても「しなくてはいけない」と語ったらしい。「世界を変えるためではなく、世界によって自分たちが変えられないようにするために」と。上條さんの話を聞きながら、何も遠い国の紛争に限ったことではないと感じた。巨大カルト組織の横行や、税収を裏金にする政権、低迷する為政者たちにも、私の人間性がすり減らされないよう自尊心を保ち、隣人の苦悩を慮れる人でありたい。

（撮影：羽柴和也）

現代美術家 上條陽子さん

作品展覧会

上條先生の作品とともに、パレスチナのこどもたちの作品も展示されます。21日は、「パレスチナ支援活動を始めたきっかけ」「現地での絵画指導の様子」「ガザより招聘来日したアーティストの現況」などを伺うギャラリートークも開催予定です。是非足をお運び下さい。

開催日時
2024年9月21日㈯〜30日㈪
10時〜16時
ギャラリートーク 21日 14時〜15時30分

場所
日庭寺 相模原市緑区城山4-2-5

編集後記

藤木隆宣

8月4日の坐禅会の後の時間に次のような話が出た。小4の息子さんと年長さんのお子様を持つお母さんの悩みです。小4の息子さんは小1の入学時から学級になじめずお母さんが付き添って学校に行き今4年生とのこと。とても頭の良い子どもさんではあるが、今でもどうしても学級になじめず週2日は本人を温かく受け入れてくれる保健室の先生の所に通って要るようだ。このようなことが続いてもいけないと考え、特殊学級に勧めたが本人はこの措置には反対してそこもうまくいっていないようだ。

今は夏休みだが新学期にはどうするかとの相談でした。この話には男性2人女性2人が関わった。女性2人のうち一人が相談者本人だ。

私は昭和19年生まれなので私の小学生時代の話をした。まず2年間は私が住んでいる集落の分校に通った。先生は奥さんと新婚で分校の隣の寄宿舎生活であった。ある日、本校に行く途中に担任の野村先生に藤木は昨日何をしていたと尋ねられた。実は同級生のO君と田んぼの水をせき止める悪さをしていたのでそのことを伝えると大きな声で叱られた。「水が行かないと稲が育たなくなるのがわからないのか」とこの時以来同類のいたずらはしなくなった。先生の一括は今にその影響があり私の善悪の基準の一つができたと考えている。ご相談の件とは関係ないようであるが決してそんなことはなく先生に怒られたことが人として大きな教訓となっている。

とにかく私の小学校時代は学校に行けば友達がいて三角ベースボール、ドッチボール、冬は卓球などで遊べて面白かった思い出が多い。学校から帰れば近くの神社で鬼ごっこ、缶けり、パッシン、こま回し、かくれんぼなど日が暮れるまで遊んだものだ。決して豊かではない時代だったが振り返れば良き時代だったと思う。

さて、ご相談の話に戻そう。私の小学生時代は田舎で自然が豊かで小川が水泳教室でもあった。このことと比べると今の大都会の中では大きな自然はなく、遊び場も少なく子どもたちが自然の中で思い切り遊ぶことだ出来なくて子育ての環境としては最悪の現状が見えてくる。と考えると都会の子どもたちに私たち大人は自然をプレゼントしなければいけないと思う。でない小さい時からこころを育組む環境が都会にはないことになり健全な成長が期待できないからだ。

子どもは自然の中から人間の基本が学べる仕組みになっていると考えている。

宗教法人はおかげさまで結構な環境が整っている。もちろん全部の寺院ではないが、もし出来たら私たち宗教法人が社会に大きな貢献ができる一つとと考えるがいかがであろうか。

サッカーの練習を終えて挨拶

子どもたちが生活する手まり学園ユニットと広場

郵便料金値上げによる、送料変更のお知らせ

ゆうパケットとゆうパックの値上げで、

ゆうパケットは8月から
¥300→¥310

ゆうパックは10月から
¥40～¥200の値上げ

になります。

地域によります

手まり学園

寄附者御芳名（敬称略）

R6.6.1～R6.7.1

所在地	寺院名（個人名）	金額
神奈川県	青木義次（128）	5,000
神奈川県	青木義次（129）	5,000
合計		1,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります） すべて税別価格です

『修証義』解説 丸山劫外著	1,400円★
『まんが問答一期一話』 文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』 長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』 須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』 須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 霊元丈法著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著	500円
『宗教人類学の地平』 佐々木宏幹編著	2,300円
『仏教人類学の諸相』 佐々木宏幹著	2,300円

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月31日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月31日

1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

お申込み

仏教企画

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号でも可能です。